



年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)

最適解を見つけることができる年齢になった

「あなたがたは地の塩である。」(5・13) 「あなたがたは世の光である。」(5・14) 生活を豊かにする物を引き合いにして、キリスト者は世にあって「塩」や「光」であることを表していく必要があります。私たちに求められていることと、私たちが避けるべきこと、両方について考えてみましょう。

全国版のカトリック新聞に、2月11日「世界病者の日」の教皇メッセージが掲載されていました。病者の置かれている弱い立場に、教皇様は深く思いを寄せておられます。病を得たことで、より一層イエスの「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11・28) このみことばに招かれていると語ります。

また、病者に寄り添う人にも「寄り添うことの大切さ」を語りかけます。キリスト者の果たすべき七つ身体的な慈善のわざとして、「飢えている人に食べさせること、渴いている人に飲み物を与えること、着る物を持たない人に衣服を与えること、宿のない人に宿を提供すること、病者を訪問すること、受刑者を訪問すること、死者を埋葬すること」というものがあります。私たち一人ひとり、また教会も、病者にとっての「宿」となるべきだと呼びかけています。

いつも、教皇様が発するメッセージは、身近な人にとっての「光」となる言葉です。教皇様の影響力があって、一つひとつの言葉はより輝くわけですが、教皇様の「光」のような言葉、その力の源は、間違いなくイエス様です。イエス様という「光」を、教皇様という立場で私たちに示してくださっているのです。

そうであるなら、私たちも考える必要があります。「あなたがたは世の光である。」私の中に、そのような光り輝くものがあるだろうか。教皇様から学べることは、自分の中におられるイエス・キリストをうまく示してあげるなら、私たちも光り輝く言葉、珠玉の言葉が語れるということです。

私の母方の祖母は、日曜日のミサには一山越えて来ていました。佐々から、江迎に来る山越えのような道でした。吉井町経由のように平坦なバス通りもありましたが、近道の山越えで必ず来ていました。何度か祖母と一緒にミサに来ました。祖母は、「山を越えて教会に行くのは辛いに違いない。しかし、歩く調子に合わせて『天にまします』を唱えれば、とても簡単に山を越えることができる。」繰り返しそう言っていました。

小学校も最後まで通えなかった時代でした。カタカナしか読めませんでした。そんな祖母でも、私に生涯残る教えを残してくれたのです。祖母は孫に「困難を乗り越える時に主の祈りを唱える」と教えることで、心の中におられる「イエス・キリスト」を光り輝かせてくださったのでした。

最近は私も料理に非常に興味があります。男性の料理教室もはやっているそうです。本日、前のほうに座っている 60 歳になられて健康を祈願する参加者も、料理をなさることもあるでしょう。その中で、「塩」をうまく料理に活かすコツもたくさんご存知だと思います。

「塩」はほんのわずかの量で料理を活かしたりダメにしたりします。「砂糖」はもしも量が多くてもまだ許せますが、塩が多すぎるのはもう食べられないと思うのです。本当に「塩」は、わずかの量で味を決めたり、長く保存することができたりするのです。

「あなたがたは地の塩である。」健康を願う本日の参加者も、社会の中にあって「塩」の働きをします。私たちが気の利いた「塩」というよりも、私たちの中にある「イエス・キリスト」という塩をお一人お一人うまく対人関係や社会活動の中で活かしていくわけです。

「塩気が足りない」「塩味がきつすぎる」もしそのようなことがあるなら、それはお一人お一人の中のイエス・キリストを引き出すときに、どこか手順に問題があった可能性があります。非常に有名な方を例えに、絶妙な「地の塩」としての働きを紹介します。

今は上皇后様となられた美智子様は、正田家に生まれ、熱心なカトリック信者でした。皇室に入られたので、ご自身の経歴を大上段に振りかざすと大問題になります。ですが上皇后様は、かつて訪問先でピアノを前に、「一曲演奏なさいませんか？」と勧められ、初めは丁重にお断りしたのですが、是非にと勧められたので「それでは・・・」と仰って「アヴェ・マリア」を演奏なさったというのは有名な話です。

上皇后様は、たくさんの曲を即興で演奏することが可能だったでしょう。けれどももその中で、あえて「アヴェ・マリア」を演奏なさった。控え目に、ご自身の深い奥底に流れていたカトリックの信仰、心の中の「イエス・キリスト」を、絶妙な加減で示されたわけです。

このような「地の塩」としての姿は、ご挨拶の結びに「祈ります」と添えられたことでも知られています。皇室は決して「祈ります」とは言わないのです。それが、上皇后様が皇室に入られてから、上皇様も含めて「祈ります」と仰るようになりました。

「地の塩」「世の光」私たちの中のイエス・キリストを指し示すのに、絶妙な加減とか、部屋全体を照らす最も適した場所を見つけ出すには、歳月を重ね、たくさんの経験を積むことがどうしても必要です。今日お集まりの、健康祈願祭のミサ対象者の方々は、まさにうってつけの人材です。これから、皆さんの中の「イエス・キリスト」を世に示す「地の塩」「世の光」としての活躍を期待します。そして皆様のために、続けてこのミサの中でお祈り致します。